なゝかまど
東京旭川会
会報

旭川市開基90周年を祝して集う（55年10月）

地元からも多数が参加

第4回総会・懇親会報告

第3号　昭和56(1981)年1月31日
発行　東京旭川会
東京都新宿区西新宿7-4-3 升本ビル
東京美装興業株式会社内
TEL.(03)363－2721
編集　東京旭川会会報編集委員会

遠くふるさと想い、その発展を――東京旭川会の第四回総会と懇親会は、昭和五十五年秋、十月三日、東京・赤坂のホテル・ニュージャパンで華やかに開幕された。東京旭川会創立以来、平岡敏男会長をたすけ、物心両面から尽力された谷武雄副会長が、総会を間近かにした九月十七日、急逝され、幹事会、総会などに欠かせなかった、あの人なつっこい顔が、もうみられなかったのは、一抹のさびしさを感じさせた。参加者百六十一人、故郷から大西功旭川観光協会会長ら各代表、ミス旭川、準ミス旭川のほか、地元選出の安井吉典、川田正則、五十嵐広三、上草義輝の衆院議員四氏も顔をみせ、和気あいあいの中を、故郷の銘酒を汲みかわし約二時間にわたる〝ふるさとパーティー〟は歓を尽した。（詳細二～三頁）

（写真は上右・ミス旭川が平岡会長へ花束を―。上左・和やかに祝辞を述べる地元出身の国会議員各氏（右より五十嵐広三、安井吉典、川田正則、上草義輝の各氏）。右下・盛沢山の料理を囲んでの懇親会パーティー）

"旭川のための会に"と百六十一人

総会では副会長三人制決まる

総会は夕刻の午後六時、八木祐四郎常任幹事の司会で開会。議事に先立ち、谷副会長のご冥福を祈って一分間の黙禱を捧げた。ついで平岡会長が議長席につき、議事の審議に入った。安藤正人常任幹事が議事（別掲参照）について説明、万場一致で可決。議長から副会長を三人にしたい旨の提案があり、谷副会長逝去に伴う後任をふくめ、御手洗正夫、吉田敏明両氏が新しく副会長に就任、宍戸馨副会長とともに三人制となった。ついで新任の両副会長からそれぞれ挨拶があって、総会を終った。

ひき続いて懇親会に移り、平岡会長が「東京旭川会も回を重ねるたびに会員もふえ、出席者もふえている。今後、ますますこの会を発展させ、旭川のための会にしたいので、どうぞよろしく」と挨拶。ついで、太田剛北海道クラブ理事長が「九月二十日、旭川で開基九十周年の祝典が行なわれるのを機会に、北海道出身者三十数人で旭川を訪れた。八十周年を迎えた名寄市も訪れたが、とくに旭川では盛大な歓迎会を開いていただき、席上、市民のコーラス団三十余人が、私たちのために歌をきかせて下さった。これには感激をすると同時に、さわやかさを感じた。故郷旭川も人口が三十五万人をこえたが、発展のためにはさまざまな問題を抱えている。東京にいる旭川出身の皆さまは、郷土のためになるように、さらに協力していただきたいと思う」と述べ、東京旭川会と旭川市の発展を願って、乾杯の音頭をとった。

続いて、坂東徹市長のメッセージ（別掲）を表秀雄旭川東京事務所長が代読、小柳勝人市議会議長の挨拶文が読みあげられた。

杖をついた大西観光協会会長が故谷副会長に思いをはせながら、郷土の発展のためにと熱弁をふるった。小檜山享旭川商工会議所会頭が「二次産業の開発で旭川の発展を考えたい」と旭川の近況を伝えた。

続いてミス旭川・宍戸章子さん、準ミス旭川・柿崎智子さんが紹介され、会長、副会長にそれぞれ花束を贈呈、山海の珍味を前に和やかなパーティーに移った。

会場受付は早くからやってきた参加者で混雑した

あいさつする大西観光協会長

旭川市九十周年も花そえる

会場には「旭川市開基九十周年式典」の模様を伝えるビデオ・テープが旭川市東京事務所のご好意で放映された。また、式典の模様を伝えるカラー写真も掲げられ、会場に彩どりをそえた。最近、ふるさとにはとんとご無沙汰している会員たちの間から「ほほう、九十年か。旭川も大きく発展したものだ」などの声しきり。

また、東京旭川会は故郷旭川を代表する大の組織なだけに、北海道関係企業からの寄贈品が山のよう。坂東市長から参加者一同に「旭川ラーメン」、さらに男山、合同酒精、サッポロビール、十勝ワイン、ニッカーウヰスキー、橋詰商店から酒肴が寄贈され、参加者一同感激。飲み切れないほどの酒類にオールドボーイもヤングも大いにメートルをあげて歓談を続けた。パーティーのしめくくりに、野口正二郎合同酒精社長の発声で万歳三唱、解散した。

坂東市長のメッセージ

第四回東京旭川会総会の盛会を心からおよろこび申し上げます。日頃から旭川市勢発展のため並々ならぬご尽力をいただいている東京旭川会の皆様に心から感謝申し上げます。今年九月二十日、旭川市は開基九十周年を迎え、盛大のうちに無事記念式典を挙行することができました。今後、旭川市は多くの市民の情熱と英知を結集し、新たな発想のもと、旭川百年へ向けて、旭川二世紀へつながる方向づけをしていく決意をあらたにしたところであります。

今後とも旭川市発展のため、皆様のご後援とご協力を賜わりたく重ねてお願い申し上げる次第です。本来であれば、上京して皆さまに親しくお目にかかり、ご挨拶申し上げるべきところでありますが、現在第三回定例市議会開会中であり、小柳議長ともども残念ながら出席することができません。失礼をお許し下さい。今後、東京旭川会の益々のご発展と皆さまのご健勝を心からお祈り申し上げご挨拶と致します。

昭和五十五年十月三日

旭川市長　坂東　徹

〝これ下さい〟〝ハイ！ありがとうございます〟

〝郷土の味〟即売コーナーに人気

第四回総会でも〝郷土の味〟の即売コーナーに黒山の人だかりで人気を集めた。旭川市の橋詰商店（橋詰敏氏）が特価提供の山海の珍味がずらり。新巻鮭一尾二千円から、イクラ四百グラム入り三千二百八十円、筋子一箱二千五百円から、貝柱百八十グラム入り二千五百円と市価の三割前後安、このほかミガキニシン、昆布、バター飴、珍味、旭川ラーメンなど。今年は、十勝観光協会提供のラベンダー香水や香水石けんもならべられた。

「いかがですか、安いですよ」と婦人の幹事が参加者に声をかける。人間の心理とは妙なもので山積みしてあるうちは、なかなか買っていただけないが、数が少なくなると、さっさと捌けてしまう。タラコ、筋子、ラーメンなどは人気の的で、またたく間に売切れ。「あれっ、もう品切れですか」との声もあちこち。売場主任（？）の田村昌士常任幹事によると、総売上金七十四万六千円にのぼったとか。その利益三万二千円は会費にまわされた。

縁というもの

会長　平岡敏男

縁というものはどこにあるかわからないと昔からいわれている。東京旭川会の幹事会の席で、玉田郁生さんから故父君、玉田秀雄氏の歌集「風塵集」をいただいた。それというのも、私の雑文集「焔の時灰の時」のなかで、私が故小田歓螢さんとのかかわりあいについて書いてあるのをお読みになったからであろうが、小田さんは、短歌の上で玉田父君の先生格であり、「風塵集」に序文を書いておられる。小田さんらしい情愛のこもった美しい文章である。

小田さんの文章のなかに「昭和二十年出征して二十三年に復員した長男郁生君」ということばがある。そう思って読むと、歌集「悲喜」のなかの「長かりし六年は夢か、七人の祝子そろひて今宵飯食ふ」という一首の淡々たる感懐のなかに格別の味わいが感じられる。

その玉田郁生弁護士が私の友人・太宰治の美知子夫人から依頼されて、法律上のトラブルを処理されたというのも、縁というものであろう。私は太宰の養嗣子・津島雄二代議士や園子夫人とも、いくらかのかかわりをもっている。

旭川が生んだ詩人・故小熊秀雄の全集に五十三年度の毎日出版文化賞が贈呈された縁もあり、また旭川文化団体協議会の事務局長で小熊秀雄賞の世話をしている谷口広志さんのおさそいもあったので、五月二十四日、私学会館で開かれた小熊秀雄没後四十年祭の記念パーティに、私も出席した。小熊は、私より八歳も年長であったが、旭中時代、文芸関係で、二、三年つきあいがあった。そのことは、やはり、私の雑文集に書いてある。

そのパーティーで、私も挨拶をさせられた。ところが、十一月に出た「旭川市民文芸」で、桜井勝美氏が「東京・小熊秀雄祭に際して憶う」という文章をのせ、そのなかにつぎのようなくだりがある。

「平岡敏男氏（毎日新聞社長）の乾盃でなごやかな雰囲気がかもしだされていったが、わたしは平岡氏が旭川出身の方であることも、小熊とのかかわりも全くしらなかった。氏と盃をかわしての懇談の中で、わたしの出身校である旭川師範、そして先輩の青木平三郎、海老名礼太、入江好之氏などの追憶の話ができたこと、これも小熊のひきあわせによるものでありがたいことであった」

旭中三、四年のころ、私どもは詩歌の関係で旭川師範のかたがたと、接触があった。入江さんは札幌で出版業を営んでいる。五十数年間おあいしていないが、詩集をもらったり私の雑文集をあげたこともある。青木さんには、旭川会総会で、五十数年ぶりでお目にかかった。東洋大学を出て弁護士となり、大学の理事長をしておられる。縁というものは、ふしぎなもので、面白く、楽しく、うれしいこともあるものだ。

（毎日新聞社会長・題字筆者）

●第四回総会出席者（順不同）

県二郎、青木平三郎、青野茂、赤松綾子、安藤正人、伊藤一男、井川正、坂井一瓏、稲田稔、石上正博、市田勝一、五十嵐広三、板谷公弘、上草義輝、氏家一衛、太田剛、太田明、太田幸雄、太田龍太郎、大野一郎、大城栄子、大西幸男、大室惣一郎、大村高久、表秀雄、尾崎哲、折登建憲、大石武夫、大瀬戸豊明、尾崎靖亮、奥原正枝、落合隆朋、加藤辰雄、河村尚之、河端敏博、金子登、亀井啓子、金安勝雄、河毛矩子、金津良三、笠木真知、河端昭雄、川田正則、鎌田政子、菊地拓、菊地文男、北川一智、黒崎弘、工藤義男、熊木啓一、窪田稔、桑本平八、小島猛夫、小西栄一、小池栄寿、佐藤正彦、笹谷栄一郎、笹谷享一、佐々木喜三郎、佐々木富幸、斉藤寿子、沢登博美、榊原潔、茂川敏夫、篠永義雄、須藤正一、鈴木吉之、鈴木与之助、関口和子、関口建雄、関谷赳夫、世良保、関口緑、竹原茂雄、田村昌士、武田範芝、武田陽子、竹内薫、高木明、玉田郁生、高橋武夫、辻信吉、都筑秋子、寺崎勲、中原虎雄、中山義夫、中落英一、中井律子、新田実、西田育子、野口保元、野村トシ子、花輪音三、花輪元治、原公朗、坂東宗光、橋本直久、芳賀照雄、萩野敏夫、馬場量定、橋詰敏、長谷川建一、早川清一、長谷川平八郎、平岡敏男、久富勝次、広瀬芳一、日置利保、福居浩一、藤本全三、深井弥一、藤崎寅雄、藤井繁、堀川和延、松原利治、松浦常雄、牧田逸子、前木誠、馬渕憲三、御手洗正夫、三井勲、南栄二、三浦規、宮下博夫、造酒多津男、村井与吉、村上勇、室谷文治、向井正彦、牟田照雄、森喬伸、森稔、師橋孝、八木祐四郎、矢木茂昭、山本政治、山内道憲、山川一、安井吉典、吉田敏明、吉田雅俊、吉田千里、吉沢省二、吉武恭一郎、米道豊蔵、吉田克良、吉田律子、横峯昇、米島敏雄、渡辺信昭、

開基百年に向け新たなスタート

旭川市九十周年式典盛大に

記念式典で式辞を述べる坂東市長

旭川市開基九十周年記念式典は、さわやかな秋空に恵まれた九月二十日、二千人近い招待者が市民文化会館大ホールに集い、開基百年に向け「新たなる出発をしよう」と盛大に開催された。明日を担う小中高生の代表、政・財界など各界代表をはじめ、旭川市の姉妹都市・米国イリノイ州ブルーミントン市からブキャナン市長、同市と兄弟関係にある同州ノーマル市からゴットフリー市長ら合計三十五人。さらに友好都市・ソ連サハリン州ユージノサハリンスク市（旧豊原）からギロージン市長ら三人が友情のメッセージを携えて参加した。

明治二十三年九月二十日、人口わずか六百九十七人、北海道庁令第六十一号で、旭川村がうぶ声をあげた。

原生林上川原野に、言語を絶する苦難を重ねて開拓を進めてきた。いまや人口三十五万三千人と、関東以北では札幌市、仙台市につぐ第三の都市にまで成長した。記念式典の当日のスタートとしては、[illegible]花火が常磐公園など五ヵ所から打[illegible]あげられ、陸上自衛隊第二師団音楽隊のファンファーレが流れ、開会宣言、君が代斉唱、先人の苦労をしのんでの黙禱。坂東市長が大要、次の通り式辞を読みあげた。

「私たちは、今、この九十年という一つの節目に立って、多くの市民の情熱と英知を結集し、新たな発想のもと旭川百年へ向け、旭川二世紀へつながる方向づけをしていかねばなりません。

特に旭川市は北方圏に位置していますが、北方圏各国の都市は古くからそれと調和し克服し繁栄してきているのです。いま私たちは、その北方圏の国々へ目を向けるべきであります。そこには必ず北方圏に根ざした、北国旭川の特色を十分に生かせる新たな発想が生まれてくるものと信じます。

今年はまた、一九八〇年代の幕明けであり、同時に地方の時代の幕明けの年でもあります。地方自治体もまた行財政全般にわたり多くの難問をかかえ、新たな試練を迎える重要な時期に直面しているといえます。

これからの地方の時代を築いていくためには、多くの分野で他の市町村との連携が必要となってまいります。現在建設を進めている旭川新空港のジェット化、北海道自動車縦貫道の建設、国鉄新幹線の導入、地熱開発、食糧基地として新産業の開発、研究学園都市構想の促進など、いずれも北海道発展計画や新広域市町村圏計画とも関連する問題であります。

私たちには先人から受けついだパイオニア精神が体内に流れており、未来に挑戦する英和と情熱をもちあわせております。相互に信頼し、連帯の輪を拡大させて『明日に希望のもてる旭川』を築くことを市民の皆さまとともに、誓いあいたいと存じます」

このあと、記念表彰に移り、功労顕彰に毛利テイさんら十一氏、功績表彰に栗山久作さんら十九氏、善行褒賞として渋谷鉄夫さんら十五氏がそれぞれ表彰され、前・現代議士、道議ら十八人に特別感謝の楯が贈られた。東京旭川会からも平岡会長をはじめ、顧問の前田義徳、太田剛の三氏に特別感謝の楯が贈られた。つづいて堂垣内知事、西尾道議会議長、板垣北海道市長会会長（代理）をはじめ、ブルーミントン市長、米国イリノイ州ノーマル市長、ユージノサハリンスク市長らの祝辞、小柳市議会議長の謝辞の後、中島助役の閉会の辞で、二時間の式典が終了し、旭川混声合唱団のコーラスが彩どりを添えた。

北方圏産業経済センター

地場製品の展示、新技術の開発、情報の集約などの多目的機能をもつ「北方圏産業経済センター」の建設基本構想が旭川市産業会館建設調査懇話会でまとめられた。敷地規模は一万八千平方メートル、建築費は七十八億を一応の目安としている。

基本構想では、北方圏地域産業育成機能として展示場、催もの会場、会議場、中小企業大学校など。北方圏地域生活文化創造機能として展示ギャラリー、消費生活センター、寒地総[illegible]研究センターなど。総合情報機能として産業経済、観光情報センター、通信センター、行政資料室などを盛りこんでいる。

北欧視察団帰国する

旭川市は開基九十周年の記念行事として、市民ぐるみの北欧視察を計画。第一回旭川市青年・婦人北欧視察団として一行三十二人が、坂東市長を団長とし、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、デンマークの四ヵ国を昨年十月八日から十五日間にわたって歴訪、冬の住宅団地のあり方など各分野にわたり視察、多くの成果をあげて帰国した。

とくにストックホルムでは、住宅団地や各種公共施設、身障者や老人の福祉住宅などを、ヘルシンキでは住宅団地を造成する際、職場もその中に取りこんで、職住接近計画に見るべきものがあった。

この北欧視察団計画は、今回に限らず、毎年継続して進められることが関係各方面から望まれている。

「旭川小唄」誕生物語

昭和六年、一般から歌詞募集した「旭川小唄」は、当時新進気鋭の古賀政男氏が作曲、戦前、広く市民に親しまれていたが、昨年十二月、半世紀ぶりに旭川市吹奏楽団により演奏された。さらに「この歌は古賀が北海道に残した唯一の曲。末永く保存したい」と東京の古賀政男記念博物館からの要請があり、この楽譜が送られた。

「旭川小唄」は昭和六年、当時の旭川新聞社が「大旭川を象徴する旭川民謡歌詞大募集」として一般から募集、二千四百六十編から選ばれた

郷土ニュース

ニュース提供：
旭川市東京事務所

当選歌。作詞者は旭川出身、元教員の波多野勝さんで、いまも七十二歳の高齢ながら元気で暮らしている。

最終選者は時雨音羽さんで、古賀さんが作曲、レコード化された。ところが戦時、戦後の混乱で三千枚ほど作られたレコードもなくなり、また、その楽譜も持っている人もいなくなった。それが一昨年、市民の一人がたまたま発見した。さらに旭川吹奏楽団が昭和五十五年秋、第一回演奏会で披露、話題をまいたものである。

歩くスキー大会を計画

旭川市では、今年三月二十一日、国際的に有名なスウェーデンのバーサ・ロッペ形式の歩くスキー大会、「国際旭川バーサ大会」(仮称)を計画している。一万人動員を目標にした日本では初めての大会となる。

バーサ・ロッペは、発音によっては、ロープ、あるいはロペットともいい、五十年も続いており、国際的な冬の祭典となっている。

「国際バーサ大会」の話は、五十五年の二月、東京旭川会と旭川市および旭川経済界との経済交流会の席上、東京美装興業の八木社長から提案されたのがはじまり。

その結果、原案として、旭川競馬場をメーン会場に十八キロコースを設定、スキーシーズン(　)イナーレを飾る意味から、春分の日の三月二十一日に挙行と決定。実行委員会を組織し、協議を重ねている。

道立美術館建設へ

旭川市に道立美術館を建設する準備が、現在着々と進められている。本格的な工事は本年度以降になるが、同美術館は札幌市にある道立近代美術館の地方館的役割をもつもので、北海道教育委員会が計画している、道内四ヵ所の第一号となるものである。計画では、鉄筋コンクリート平屋建て二千百五十平方メートル、総工費約九億円で常磐公園西側に建設することになっている。オープンは五十七年七月予定。

ロダンの彫刻お目見え

旭川市は開基九十周年を記念して、フランス国立ロダン美術館から近代彫刻の父といわれるオーギュスト・ロダンの彫刻作品「ジャン・デール裸体習作」を購入、八月二十九日、その彫刻が旭川市に到着した。高さ一・三メートル、幅三十センチの中型作品で時価二千万円。新設の旭川美術館に飾られる。

平岡会長が図書を寄贈

当会の平岡会長は、旭川市立図書館に自然科学、芸術関係などの図書百九十七冊を開基九十周年を記念して贈った。同図書館の蔵書は約十二万冊。市からさっそく同会長に感謝状が贈呈された。

旭川中学の同期生(十六回)で新農林社監査役・元熱海市郵政省老人ホーム所長・後藤正士君に聞いた話にひどく感動したのでここに記しておきたい。

大正の中頃まで旭川中学は道北、道東一円にただ一校しかない中学校だった。従って遠方からの入学生のために南寮、北寮の二つの寄宿舎を持っていた。後藤君は大正七年入学して北寮に入った。時の舎監は鈴木栄蔵先生で数学を教えておられた。先生の風貌は、大学目薬の商標とそっくりだというので「大学さん」という愛称で親しまれていた。後藤君は卒業まで五年間、先生ご夫妻に肉親の父母のようなお世話をいただいた。

それから五十余年の歳月が流れた。昭和五十四年三月、東京の旭中同窓会があったおり、旧北寮生であった元名寄信金理事・長島田要一、苫小牧東部開発社長・太田剛(何れも旭中十九期)の両氏と後藤君から、北寮出身者の集いを持ちたいということにおよび、さらにお世話になった「大学さん」ご夫妻は既に故人であろうが、せめてお孫さんでもお招きして、先生の追善供養をやろうということになった。お孫さんということになったのは、昔鈴木先生の養子の方が外務省勤務で外国に赴任され、お嫁さんが女の赤ちゃんをつれて北寮に来ておられたので、何とかしてその居所を探し是非お招きしようということになり、探し方を後藤君が引き受けた。

鈴木先生は大正十五年旭中を辞し、宮城県涌谷に移られていた。後藤君は太田剛氏に連絡すると、太田氏は昭和(　)年秋、県立高女に勤務している鈴木先生を涌谷に訪問したことが分った。その時、先生は非常に喜ばれ、太田、島田氏らが卒業記念に贈呈した金鎖と金時計を見せられたりした。が、先生は翌三年一月六十歳で亡くなられてしまったのだった。

いろいろ調査した結果、北寮に来ていた赤ちゃんは光子さんといって、十八年に結婚されたが、主人は応召、翌年戦死されたため、悲しんで一ヵ月後、二十三歳の若さで後を追った。鈴木先生の奥さんは埼玉県杉戸町の実家に帰られ、甥(兄の子)に世話になられた。この甥には三人の娘さんがいて、昭和四十一年十二月九十一歳で奥さんが亡くなられるまで、親身になって世話されたというようなことが分った。

こうしてついに恩師の遺族を見つけた後藤君は、いよいよ追善供養のために太田剛、島田要一両氏や元名寄市長池田幸太郎氏(十五期)と緊密に連絡し、埼玉県春日部市の大王寺で先生ご夫妻の合同追善供養を旧北寮出身者一同で催すことを決定、それぞれ案内をした。

昭和五十四年十月二十八日の日曜日、午前十一時、お寺に集合した。遺族側からは先生直系のお婆さん、奥様直系の杉戸の三人の婦人ら七人。

旧北寮生は河村正雄(十四期)池田幸太郎(十五期)後藤正士(十六期)木原栄一(十七期)太田剛、図司幸次郎、島田要一、平賀幸五郎(以上十九期)定久武雄(二十一期)大森昌行(二十二期)の十人であったが、参加できなかった旧寮生からは全員、お供物他弔文弔電があった。三百二十一字という長文の電報を寄せられた旧寮生もあった。

追善の読経、焼香が終り一同は墓参、記念撮影をした。後藤君はまた、旭川の同期生植松義則君に頼んで旧旭中の鈴木先生の履歴書の写しを送ってもらい、これをコピーして遺族の方々に配布した。遺族の方々は思いがけない供養に先生ご夫妻の遺徳を偲んで一同に感謝された。

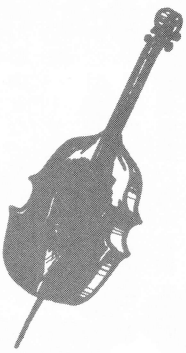
式後、近くの小料理店で供養があったが、それぞれ今は老境の昔の頑童も先生ご夫妻の思い出話が尽きないのであった。同席した住職も立って、この様な心のこもった立派な供養に初めて接したと賛辞を述べたとのこと。

私はその話を聞いて近来にない感動を覚えた。先生ご夫妻の遺族を探し歩いた後藤君、この催しに物心両面で尽くされた太田剛、島田要一の両氏、挙ってこの供養に協力した旧北寮生ら先生の遺徳は五十年後の今日も教え子の心の中に報恩の思いをいや高からしめた。師弟一如、良き師を持った感激、良き教え子を得た喜び、先生ご夫妻の余徳が子孫に及んだこの麗しさを何と表現出来よう。私は感嘆するばかりであった。

謹んで「大学さん」ご夫妻の冥福を祈りつつ。(我孫子市在住・詩人)

川のある風景

三浦清史



秋のウィーンは、厚い雲におおわれて、陰気な空模様だった。

九月の中旬から翌年の四月下旬までというものは、ウィーンの街は厚い雲の下で、長いきびしい冬の季節となる。

しかし、この冬の間は、数多くの音楽会がもよおされ、音楽ファンを堪能させるときなのだ。

ハイドン、モーツァルト、ベートーベン、シューベルト、シュトラウスなどの大音楽家を輩出させた芸術の国オーストリアには、年間三〇〇万人をこえる観光客が、世界の国ぐにからつめかける。

私がこれまで、ウィーンをおとずれたのは、音楽会の多い、冬の季節であった。音楽をたのしむためにはこんな陰鬱な気候も、それなりにふさわしいようにすら思えたものであった。

だが、このたびの旅行は、ウィーンの空模様と同じように、私の胸の中を、ひときわ暗いものにさせていた。

というのは、世界的に名の知られているピアニストのワルター・クリーンと結婚した姪が、別居したために、義兄から調停役をたのまれてきた旅行だったからである。

青い眼の可愛らしい小学生の娘と、出迎えてくれた姪は、思ったより明るい表情で、私をともなってウィーンの街を歩く。

街角の焼栗屋で、姪は名物の焼栗を買い、私と娘のコートのポケットに、入れてくれた。

「今年の栗は、よく実がみのってますよ。これをかじりながら歩くと、ウィーンの寒さもふっとんでしまいますからね……。」

といいながら、それぞれのポケットに、焼栗屋の青年は、ひとつまみづつサービスしてくれた。

（わりにおだやかな別居らしいな……）

いっしょに、道みち栗をかじって歩く姪の横顔を見ながら、私は少しほっとした気分になっていた。

ハンブルグでの演奏旅行から、ワルター・クリーンがもどってくるまでの二日間、私は聖ステファン大寺院、シェンブルン宮などをまわり、バロック建築の粋を満喫した。

気の強い姪は、帰ってきた御亭主とは、最少限度の会話を事務的にかわすだけで、食事の間も、娘をぴたりとそばへおき、まるで検事のような表情で接していた。

翌日、私はワルター・クリーンとドライブに出た。男同士で話しあったほうがいいだろうと考えたからだった。

映画「第三の男」でおなじみの回転観覧車がある、プラーター遊園地のわきを通り、ドナウ川畔を、ゆっくりクルマで走った。ときどきクルマを止めて、河原におりたりしながら、口の重い彼が話した別居の理由は、

「子どもができてから、彼女は変わった。子どもという純粋な存在の前で、それまで妥協していた夫婦の本質的に異質だった面が、かくしようなく出てきてしまった。」

だから、別居してお互いに冷静に、考えることにしたのだということであった。

（これは、かなり奥の深い話だな……）

私は、芸術家同志の心のたたかいが、早くおさまるようにいのるだけで、たち入ることのできないものであることをさとった。

もの心ついたときに、身についたことは、終生はらいよけることができないものとなってくる。しかも、洋の東西のちがいは、鼻につきはじめると、際限がなくなってくるのではなかろうか……。

（しばらく、つきはなしておくほうがいいか）と思いながら、ドナウ川を見おろして、私は口ずさんでいた。

〝忠別川は水清く　絶えず流れて石みがく〟

という神楽町小学校の校歌が、旅先で川のある風景に出あうと、必ず私の口をついて出てくるのだ。

もちろん、すっかり水の涸れてし

トウキョウの中のあきひがわ

居酒屋しれとこ

東京都江戸川区新堀一―二
電話〇三―六七八―八九四三

とにかく、こんなアットホームな店は東京では珍らしい。主人が年中、現地の知床へ出かけて、自分で運んで来る鮭、筋子、イクラ、ウニ、ナマコ、カニ、ホッケ、タラなど、きわめて新鮮な材料をドッサリと大量に食べさせてくれるのが特徴なのだ。いうなれば、いかにも北海道らしく生きの良い海の幸をドサッと食べさせる店と承知していただければいいのだ。

もともと、ここの主人は旭中三十七回生で日大を出てから家庭の事情もあって、飄然知床半島に渡り、以来、羅臼の町で十有余年を居酒屋の主として過ごしてきた変わり種である。四年前、思い立って、ここ東京は江戸川区に自ら大工を伴い、木材を運んで居酒屋を開業した。従って、外装、内装とも皆混りっ気なしのセルフデザイン知床調であり、温い、懐かしい雰囲気に包まれる。

交通の便▽タクシー＝新小岩南口より京葉道路の一之橋を渡って下車、公園の上手。▽バス＝小岩駅南口より76番に乗り「新堀」にて下車、西に歩いて土手を左折して間もなく。

ふるさとに寄せる慕情

中原龍昇

私は明治三十八年に旭川市の郊外、現在は旭川市に編入されている神居の美瑛川のほとりに生まれた。神居小学校を卒業すると、旭川中学に入学し、やがて函館師範の二部を卒業した後、十勝で三年教師生活を送った。そして、昭和三年から十三年三月まで青雲小学校で教鞭をとって以来、三十四年間、つまり私の生涯の半分を旭川で過ごすことになる。

小学校時代の友だちには仁科三郎君、千葉躬治君が思い出され、旭中時代になると、植松義則君や西田薬局店主、三森歯科院長、五十嵐歯科院長の諸君がいる。また、青雲小学校での教師時代では、高橋勇吉先生、上林先生、佐々木芳吉先生。生徒としては、永沼節郎君や中山君、近藤正君。小さな芽の会としては、関口和子さんや谷口幸子、板谷友恵、越知慶子さんたちがおり、いまでも懐しく思い出される。

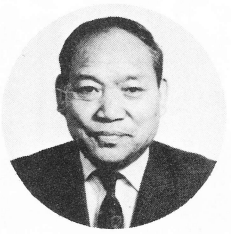
私は旭川で高橋勇吉先生とともに、全道で一番先にラジオ体操の会を始↖

まった忠別川は、ドナウ川に比すべくもない。しかし、眼をとじれば、世界の名だたる川に劣らぬ、幼い日の青あおとした忠別川の流れが、私の胸の中にあざやかによみがえっていた。

めずらしく西日がさ[illegible]いたドナウ川畔を、クルマで走りながら、川にのぞんだだけでも、意固地にこんな反応しかできない私は、姪が日本で身につけたものを、ウィーンの街で、どう夫に対応させ協調していけるのだろうか……と、不憫に思ったものだった。

（作家）

多くの声に惜しまれ谷さん逝く



東京旭川会の設立準備から、その中心となってお世話いただいた副会長谷武雄氏が、九月十七日午前九時十六分、心不全のため、虎の門病院で急逝された。享年七十二歳。

第四回総会の打合せのため、九月二日の幹事会にも元気なお姿で出席され、議事をまとめておられた直後だけに、訃報に接した会員たちは信じられない思いだった。

お通夜は九月十八日、葬儀と告別式は九月十九日、東京・中野の宝仙寺で当会の平岡会長が葬儀委員長となってしめやかに行なわれた。故人の徳を慕って約三百人の会葬者が参列し、焼香した。さようなら、谷さん。安らかにお眠り下さい。

村上勇氏　谷武雄さんを亡くしたいま、東京旭川会の大黒柱が、消えてしまったという印象はぬぐえない。谷さんのように誠心誠意、団体やグループ、あるいは個人のお世話をしてきた方も珍らしい。谷さんは方々の会合に顔を出していたが、なかでも谷さんを囲む「春光会」は楽しい集いであった。会名は旭川市の春光台からとったもので、文字通り、春うらら、春の光の中を歩もうという意味であり、谷さんにとって気のおけない連中が集まってきて語りあってきた。人のため、仲間のために尽した生涯であった。（なお、村上勇氏は、この草稿をお寄せいただいた直後の一月三日午前十一時五十分、東京世田谷の小島医院で心不全のため死去されました。享年六十九歳。村上氏のご冥福をお祈りいたします。＝編集委員一同）

御手洗正夫氏　谷武雄さんは終戦時、陸軍少佐だった。私の知る限りでは実に部下思いであった。中国の戦功は赫々たるものがあったが、顔の傷はその時のものである。戦後も昭和二十七年に出身部隊である歩兵第二十八聯隊関係者が、谷さんを中心に集まり「東京歩二八会」を結成した。氏を失ったことは、東京旭川会のためにも、また歩二八会のためにも大きな損失であり、その死が悔やまれてならない。

吉田敏明氏　谷武雄さんとは旭川商業の先輩後輩の仲であるが、おつきあい願ったのは、ここ四年くらい前からである。昨年九月七日、茨城県牛久にある合同酒精の工場を見学かたがた旭商同窓会のパーティーを開いたときのこと。「おっ、帰るのか。足はあるか。車で送ってやろう」とおっしゃるので、ご好意に甘えて便乗させていただいた。東京へ戻る車の中で、話がある亡き恩師のことに及んだ。その時、私はいまにして思えば、不用意に「支部葬は谷さん以外にないでしょうに」と申しあげた。そして訃報を耳にしたのは、それから十日目であった。

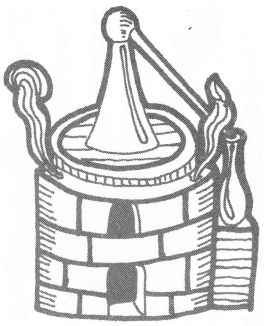
南栄二氏　谷さんは東京旭川会の創立準備の段階から、その中心となって奔走しておられた。その他にも士官学校同期会、旭商同窓会東京支部とそれぞれ谷さんを会長、支部長としてお世話していただいた。谷さんはその容貌に似合わぬ細かい神経の行き届いた方であった。とくに旭川会、同窓会などでしばしば会合する役員のために夕食代など谷さんがすすんで支払いを引受けることが多かった。会議の場所として、谷さんのビルの屋上に三坪程のプレハブの会議室を作ってくれた。暖房は勿論、コピー機まで設置してくれる気の遣いようだった。機関誌「ななかまど」もようやく第三号の発刊にこぎつけて感無量である。

田村昌士氏　谷さんは、東京旭川会の創立から尽力された恩人であった。私の印象に残っているのは、本紙の「ななかまど」になみなみならぬ情熱を示され、よく「おい、いい機関紙をつくれよ。中途半端なものならつくらない方がいいぞ。金がかかったら、何とかするから、いいものをつくれ」とおっしゃって、私ども編集委員を励まして下さったことである。夜おそく、谷さんの事務所で編集を終えると、「腹へったろう、何かうまいもの食いにいこうや」と気軽に私たちを促した。物心両面から谷さんに随分な負担をかけたものである。

伊藤一男氏　谷武雄さんの訃報をカナダはバンクーバーのホテルで聞いた。しまった。谷さん、すみませんと、心の中でわびた。谷さんとの間で様々な交わりがあったが、その中に、旭川の郷土部隊である歩兵第二十八聯史の刊行のことがあった。明治三十三年（一九〇〇年）札幌から旭川に移駐した歩二八（略称）は、一九四五年の敗戦に至る五十年間、約十万の将兵が隊内生活を送ってきた。戦前の軍隊体験を中心に歩二八史の刊行が計画され、谷さんがその中心であった。同聯隊史の編集委員の一人である私は、「谷さん、そろそろ谷さんの体験談も伺っておかなければ――」と申しあげていた矢先の訃報だったから、私は落胆ひとしおである。

↘めたり、竹田辰一先生と全道で一番早く[illegible]画教育、現在の視聴覚教育を始め、学校の先生方を集めて講習をやったりした。旭川師範附属の先生の室谷先生や入江先生のほか旭川市で最も進歩的な先生方とともに旭川子供の会をつくったり、三井専次郎（日章小学校校長）の向うを張って、三井式計数器に対して中原式掛算計数器の特許をとってがんばったりした。神楽岡で林間学校や留萌での海浜学校を開いたり、伊野沢山まで毎土、日曜日に、スキーに行く会をつくったりもした。さらに、小さな芽の会をつくって錦座でのチャリティショーをやったり、最後に越川さんの応援で赤十字少年団をつくるなど、いろいろやりたいことをやらしてもらったのが旭川である。しかし、工藤青雲小学校長には、よく叱られたものだ。その度にヤマニバー（現、四条八丁目）やモンパリに飲みに出かけたり、七丁目の屋台で酒を浴びてケンカをしたりした。終戦後、市長さんになられた方が「旭川市は軍都でなくなった。これからは商都として出発せねばならぬ」と市役所内に親切課をつくり、サービスのあり方を指導したのがキッカケとなり、高橋勇吉先生らが小さな親切運動を展開され、「みんなでつくろう人間都市」のスローガンのもと、〝親切運動〟が市内のすみずみにまで徹底されるようになったことは嬉しいことである。最近は、とかく人間らしさを失い勝ちだが、旭川の人たちはなお人情のこまやかな町づくりを進めている。食堂などでも、いつでも帰りには、お客さんがごちそう様でしたという町、旭川。旭川と聞いただけで、何か暖かいものを感じる、今日この頃の私である。

（十勝バレエ協会長）



事務局からのお願い

▽年会費納入について＝当会は会員各位のご協力により、年とともに会員が増加し、現在六百名を超す会になりました。つきましては、年間の会の運営は、皆様からの年会費（一千円）ですべて賄っておりますが、この会費未納の会員の方は事務局宛て納入を同封の郵便振替用紙でお願い申しあげます。

▽会員の加入促進について＝まだまだ東京および周辺に居住の方々で当会をご存知ない方がおられますので、とくに若い年代の方、ご婦人の方々の入会をお待ちします。昭和五十六年は、会創立五周年の年でもありますので、より多くの方々の楽しい集いとなりますよう、新会員のご紹介をお願い致します。

事務局日誌

▽昭和五十五年四月五日、会計検査（於事務局）▽五月七日、常任幹事会・幹事会開催（於事務局）「ななかまど」第二号会員に発送▽八月五日、常任幹事会開催（於事務局）▽九月二日、幹事会開催（於事務局）▽九月十六日、旭川市開基九十年式典に祝電▽九月十七日、谷武雄副会長永眠▽九月二十六日、常任幹事会開催（於朝日生命ビル）▽十月三日、第四回総会並懇親会（ホテル・ニュージャパン）▽十一月十七日、幹事会開催（於市ヶ谷私学会館）

昭和五十四年度収支決算

昭和五十五年三月三十一日現在

収入の部

繰越金	五六〇、六四七円
五十四年度会費	三二四、〇〇〇円
五十四年度総会会費	六八六、〇〇〇円
名簿売上代金	一七二、〇〇〇円
寄付金	五六五、〇〇〇円
雑収入	六二、五一〇円
合計	二、三七〇、一五七円、

支出の部

総会経費	七六二、一〇〇円
印刷費	七六〇、四六〇円
通信費	九六、九八一円
会議費	六二、八九〇円
交際費	四三、〇三〇円
諸謝金	二〇、〇〇〇円
手数料	九、八二五円
事務費	二、四三〇円
雑費	二二、〇〇〇円
支出計	一、七七九、七一六円
繰越金	五九〇、四四一円
合計	二、三七〇、一五七円

昭和五十五年三月三十一日

東京旭川会会長　平岡　敏男

常任幹事（会計担当）八木　祐四郎

以上の通り監査の結果、適正に処理されているものと認めます。

昭和五十五年四月五日

監事　竹原　茂雄

黒崎　弘

（註＝収入の部「寄付金」および支出の部「印刷費」の増は、会員名簿作成と「ななかまど」発刊」）

編集後記

★十二月末、北風のなか、やっと出来上った原稿を出版社に届ける。編集委員一同のため、いつもおそくまでつきあって下さった谷武雄副会長の姿がないのは、何としてもさびしい。谷さんという方は、武人であって「文字文化」について随分と理解の深い方であった。

★そういっては何であるが、ふるさと会とか同窓会などの機関紙は、どうもこの文字文化からみて、首をひねらざるをえないようなものがあまりにも多い。本来的には、回覧板的な性格をもつコミュニティ・ペーパーだから、それはそれでいいのかも知れないが、ちと大げさにいうと歴史は文字が伝えるもの。映像文化も文字文化があってこそ初めて成り立つものである。

★谷さんは口ぐせのように「まずいものなら作らん方がいいぞ」とおっしゃっていたが、われらの会長は毎日新聞の会長であるばかりか、すぐれた新聞記者であり、文化人だ。この会長のもとで「ななかまど」が、文字文化からみて「まずいもの」であっては申訳けがないと、編集委員一同、冷えた弁当をぱくつきながら、マス目の原稿用紙に向うのだった。

★今号も会長の名筆をいただいた。このご健筆はぜひ末長く続けさせていただきたい。「ななかまど」に文化の香りを伝えるため、次号は、ホトトギス同人で「千々二」の俳号をもつ在旭川の弁護士・大塚重親先生にご寄稿を願おうか、などという声もあがった。旭川市では「北方圏文化」といった構想をもっているようだが、歴史の浅い北海道に、もっともっと日本の文字文化を芽吹かせなければ、いうところの北方圏文化は定着しないだろう。かって「武の都」であった旭川をさらに「文の都」にするにはどうしたらよいのか。小さな小さな「ななかまど」誌もまた文字文化を——と願うものである。

（Z）

編集委員　南　栄二
田村　昌士
大城　栄子
関口　和子
落合　隆朋
佐藤　正彦
伊藤　一男
（順不同）

謹賀新年

旭川市長　坂東　徹
旭川市議会議長　小柳　勝人
毎日新聞社　平岡　敏男
教育出版株式会社社長　宍戸　馨
大平興産株式会社社長　御手洗正夫
五建工業株式会社社長　吉田　敏明
監査法人太田哲三事務所　公認会計士　黒崎　弘
竹原法律事務所　弁護士　竹原　茂雄
ダイヤモンドファミリークラブ　加藤　辰雄
西銀座法律事務所　弁護士　大西　幸男
タイプ社　須藤　正一
帝都高速度交通営団理事　安藤　正人
昭和実業株式会社社長　大矢　健
大城印刷株式会社取締役　大城　栄子
愛別ベニヤ株式会社代表取締役　奥野　寛一
昭和実業株式会社専務取締役　落合　隆朋
不二硝子株式会社常務取締役　折登　建憲
桜花会理事　笠木　真知
伊藤組土建株式会社東京支店長　金安　勝雄
東京美装興業株式会社総務部長　桑本　平八
(財)世界政経調査会主任研究員　佐藤　正彦
富岡測量関不動産　関　晁
関口工務所　関口　和子
田村縫工株式会社
東北縫製株式会社　社長　田村　昌士
弁護士　玉田　郁生
ユニバーサルアート㈱代表取締役　花輪　元治
日本教材株式会社取締役　堀川　和延（旧名哲）
東京雪印物流株式会社常務取締役　南　栄二
東京美装興業株式会社
北海道ビルサービス株式会社　社長　八木祐四郎
桜花会東京支部長　牧田　逸子
朝日生命保険相互会社常任顧問　松原　利治
株式会社鴻池組常務取締役　矢木　茂昭